

最優秀賞

# 僕のヒーロー

千葉県 君津市立八重原中学校一年 伊藤 焯

僕の腕の大きな傷。この傷あとは一生残るだろう。今も少し感覚が鈍い。でもこれを見て思い出すのは、痛みや辛さではなく、沢山のヒーロー達の事だ。

いつもの放課後、いつもの仲間、いつもの遊び場。そしていつもは「じゃあまた明日」と言って解散するのだが、あの日、みんなは何と言って別れたのだろうか。

体を動かすのが好きな男子が集まるとだいたい追いかけてっこになる。何でも本気でやるのが楽しい。追いかけてっこだって全速力。足の速い鬼から逃げきろうと、僕は高い柵を乗り越えた——つもりだった。次の瞬間、激痛が走った。左腕の感覚がおかしい。友達がタイムをかけ、ゲームは中断。腕を見ると、内側の肉がごっそりはがれていた。そこから先は、スローモーションのように覚えている。

僕は力が抜けて、呆然と座り込んでいた。一番近

くにいた友達が

「ヤバイ、ヤバイ！誰か呼んで！」

と叫んだ。自転車で来ていた二人が、僕の家に向かい向かった。また別の友達が

「すみません、友達が怪我をしたので助けて下さい。」

と通りかかった大人に助けを求め、その人が救急車を呼んでくれた。救急隊の人に現場と状況を説明したのも、その場で見ていた友達だった。

あの時、もし逆の立場だったら、自分は何か出来ただろうか。みんなが協力し正しい判断で行動してくれたおかげで、僕はすぐに病院へ行く事が出来た。手術は夜までかかり、母は夜中にうなされる僕をずっと見守ってくれていた。祖父は毎朝早くに、祖母の手作り弁当を届けてくれた。高校生の兄は、毎日学校帰りにお見舞に来てくれた。運動部で忙しく

普段はあまり一緒に居る時間がなかったのだが、点滴をして包帯ぐるぐる巻きの僕に会うなり、ブワツと大粒の涙を流して

「心配かけんじゃねーよ。」

と頭をポンツとした。母と三人で泣きながら肩を抱き合った。小さい頃「兄ちゃんの宝物ー」と言ってるギウツとしてくれていた事を思い出した。大きくなって一緒に遊ぶ事も減ったけど、今もそう思っていてくれたんだなと嬉しくなった。こんな事がなければ忘れたままだったかもしれない。家族の絆を改めて感じた。

退院後も友達は大活躍で、荷物を持ち、ペットボトルのふたも開けてくれた。他にも、急いで来て乗り捨てた母の車を運んでくれた人、慌てた母が落とした家の鍵を探してくれた人、それを預かり届けてくれた人など、本当に、みんなに支えてもらった。こんなにも人の優しさを直接感じたのは初めてかもしれない。

だから僕は、これから沢山の思いやりを、少しずつ返していきたいと思う。いつか誰かのヒーローになれるように。

